働く大人のための

「学び」の教科書

100年ライフを生き抜くスキル

東京大学・中原淳先生が教える！

僕たちに必要な本当の学び方。

東京大学 大学総合教育研究センター 准教授
中原淳

30代から40代の様々な職種の「学び賢人」を紹介！

仕事の幅を広げたい

教養を身につけたい

学び直したい

かんき出版

Case4

自らの問いや目的に向かって、足りないものをつかみに行く

Nさん（48歳）／地域ビジネスプロデューサー

【プロフィール】

高校卒業後、外資系IT企業に入社。プロセスアナリスト、マーケティングなどを担当し、16年の勤務をへて退職、大学へ入学する。

卒業後、リゾート開発・運営会社に入社、広報を担当。7年勤務して退職。その後、スペインをバックパッカーで旅し、700キロのサンチャゴ巡礼を果たした。

帰国後は、佐賀県有田焼のプロデュースにフリーランスで携わり、多くの窯元と一体となって盛り上げる活動をしている。

「学び」の履歴書

小学校高学年くらいから「死ぬまで働きたい」と思っていたのですね。子どもの頃の私には「大学って遊びに行くところ」と見えていたので、高校を卒業したらすぐに働くつもりで、「一生働くならコンピュータを学ぶべきだ」と情報処理の勉強ができる高校を選びました。

就職は、「コンピュータが使えるところ」なのはもちろんですが、「きっと自分は生意気な人間だから、年功序列の会社はダメだ」と、外資系を選びました。世界を股にかける仕事をしたいという気持ちもありましたね。

16年の在職中、まとまった学びをしたのはアメリカへの短期留学です。ちょうど、リフレッシュ休暇や有給がたまっていて、1カ月くらい休めそうなときに、友人や当時の英会話の先生にすすめられるまま大学に語学留学をしたのです。

むこうでは、とっていない授業も自由に聴講できたので、化学とか社会学とか、いろいろな授業に参加しました。語学の授業だけだと生きた英語を学んでいる気がしな

くて、専門用語が出てくる多様な授業を受けたかったのです。

1カ月の間に、授業を通して、生活を通して、もちろん遊びを通しても、ものすごく集中的に学ぶことができました。実は外資系にいるのに英語ができなかったのですが、帰国後TOEICが200点ほどアップしていました。

会社を辞めて大学に入ることにしたのは、取り組みたい「問い」が見つかったから。バブルが崩壊して、身のまわりの様相が変わってきたときでした。

進めていたアライアンスの契約を断られたり、本国の社長が変わって方針が変わって、その方針に納得がいかなかったり。深夜残業が続くなか、うつ病の仲間も出てきた。

幸い私は元気でしたが、自分だけのうのうとしていていいのか……？　と悶々とするようになったのです。子どもの頃からなんの疑問もなく「死ぬまで働く！」と豪語してきた私だけれど、「そもそも人はなんのために働くのだろう？」という疑問にぶつかりました。また、「日本人であること」を改めて考え直したい気持ちもわき起こり……。

「日本人の私がなぜ米国資本に労働力を提供しているんだ?」「そう考えると日本人なのに日本のことがそんなに好きじゃなかったかもしれない」「そういう日本人は少なくないかもしれない」「もっと『日本人が誇れる日本をつくること』が大事なのではないか?」……だから、最初は日本のメーカーに転職しようと思ったんですよ。

でも、**たぶん会社を変えても「なんのために働くのか?」という問いにまたぶつかってしまうだろう。だったら今こそ学ぶときじゃないか? と考え直して、会社を辞めて大学に入る決意をしました。**

18歳にまじって34歳の私が大学1年生になったのです。

経営戦略、マーケティング、社会システムなど、自分の目的に沿ったものなら、必須単位以上のコマ数になっても授業やゼミに参加しました。

就職を意識するようになったのは、大学4年生の夏。周囲はすでに内定をとっていて、行き先がないのは私くらい。当時、NGOでインターンをしていたのですが、ある日、協賛金をいただくお願いをしにNGOスタッフと一緒に企業訪問をしたついで

に、その会社の方に「御社に入るにはどうしたらいいですか?」と聞いたのです。日本の大手メーカーでした。

その人は、「日本の企業は、あなたみたいな人は怖くて雇えないのが実情です。真っ白な新卒をとって、自社色に染めたい。日本の企業は遅れていると思います。あなたがやりたいことができるのは、定年間際だと思いますよ」とハッキリとアドバイスしてくださって。

帰り道、同行したNGOスタッフに「本当にあの会社に入りたいなら、社長あてに手紙を書いてみたら?」とアドバイスされたので自宅でペンをとりました。ところが、いざ書こうと思っても書くことがない。それで、日本のメーカーへの入社希望をリセットして「日本のために何かできるところ」を軸に探し直しを始めました。

就職サイトで見つけたのが、後の再就職先となる、まだ大きく発展する前の、リゾート開発・運営会社。地域の伝統や魅力・特色を活かした施設づくりとおもてなしを貫いているところだったのですね。

事前に運営している施設をリサーチに行き、社長の講演会に参加。終了後、社長に

声をかけ、リサーチを踏まえた提案を書いた手紙を渡して直談判。このアプローチしか、突破口はないと思ったからです。

大学では、ユニバーサルデザインのNPOでインターンをしていたので「ユニバーサルデザインを取り入れませんか?」と提案したのですが、3日後に「広報に興味があったら入社しませんか?」と連絡があり、入社することにしました。

7年勤務して、会社の方向性と自分のやりたいことが少しずつ乖離してきたことを感じたため退職。

次の仕事を決めないままに退職しましたが、SNSで公表すると、お声をかけていただいてフリーランスで働くことになりました。

ちょうど、佐賀県有田焼の400周年記念のプロジェクトがあり、そのブランディングの仕事です。もちろん、焼き物業界はシロウトで、何もわかりません。

けれども、前職で日本各地に宿をオープンさせる仕事にも関わっていた際、地元の工芸品などを取り入れていたため職人さんたちと話すことが多かったのですね。

職人さんたちの仕事はおもしろいと思ったのと同時に、市場のニーズに合っていな

い商品を作っていたり、利益のことに無頓着だったりと、驚くことが多くて。「このままでは日本の伝統文化が滅びてしまう！」という焦りと、それを残すことに貢献したいという使命感があったので、お声のかかった仕事はヴィジョンとピッタリでした。現在は東京と佐賀を行ったり来たりする生活を送っています。

「学び」から得たもの

大学で学んだことは、仕事現場でかなり使えました。たとえば、再就職活動の際にリゾート開発・運営会社の施設を下見に行きましたが、お客さんのふりをして30人のスタッフに声をかけてインタビューをしたのです。

「大事なお客様をご案内しないといけないのだけれど、その人は車いすで、かつその人には初めてお会いするのです。どうしたらいいか下見に来たのですが……」と声をかけて、どんな反応をするかチェックした。

これ、研究活動で行うフィールドワークと同じなのです。再就職してからも、上司に納得してもらうための説明や資料づくりで、論理的説明力を使ったり、論文を書いたときの経験を活かして矛盾のない説明や、要所に「コトラーがいうには……」「新

聞のデータによると……」など事実や数字を必ず加えることを心がけました。

また、**先達の行ったことに疑問や仮説を立てて検証する習慣がついたのも、大学での学びのおかげでした。**

他人がいっていることをつなぎあわせて組み立てるだけでは何も生んでいません。今までなかったものを生み出さなければ意味がないのだというスタンスは、大学4年間で身についた財産だといえます。

有田焼のプロジェクトでも、まったく知らない環境に入るにはフィールドワーク＝現場に入ることからだ、と、1週間、窯元に掃除で入らせてもらって直接見て、聞いて、体験して……を大事にしました。

ただヒアリングするだけだと、その人の価値観で話すから情報にバイアスがかかりますよね。**大学の研究過程で、「フィールドワークのなかに、公になっていない真実がある。現場から問題発見せよ」ということを徹底的に叩き込まれた**ので、ブランディングというオシャレなイメージとは裏腹な泥くさい仕事の仕方をしています（笑）。

「学び」のこだわり

やりたいときが学ぶとき、困ったときが学ぶとき、だと思います。必要なものが具体的にわかっているから頭に入りやすいですよね。

会社員時代の留学や大学での学びについてはお話ししたとおりですが、サンチャゴ巡礼の前にも、3週間のスペイン語集中コースに行っているのです。

バックパッカーで行く予定だったので、命を守るためには話せないと困りますよね。「目的はサバイバルのためのスペイン語だ！」と、現在形だけ学べばいいと3週間集中しました。大学での学び方も同じです。必要なものがわかっているから、まっしぐらに学べるのです。

これから学びたいこと

また、新たな問いが生まれたのです。「みんなで幸せになるには、どうしたらいいのだろう?」って。

私はこれまで、自分がやりたいことをずっとやってきました。それをすると、もち

ろん喜んでいただけるのですが、一方で不幸になる人がいるような気がしていて。

ブランディングの仕事は、仕事のやり方やプロダクトの改善にまで手を入れるので、たとえば「生活を変えるのは嫌なのに」とか「人にアレコレいわれるのは不快だ」とかいう方がいるのではないか。もしかすると、私の行動はこの人たちを不幸にしているのではないか、と思うことがあるのです。

「変革にはつきもの。しょうがないことだ」といってしまえばそれまでですが、関わった人たちには幸せになってほしいし、みんなで幸せになりたい。

何か方法があるのではないか……というのが、今のもっぱらの探求テーマで、私にとっての問いです。

解説

Nさんは、小学校高学年から「死ぬまで働きたい」と思っていたという、かなり希有な感覚をおもちの人です。教育機関を出る直前になるまで「働くこと」を意識できない若者が多いなか、幼い頃から働くことに向き合っておられる様子が印象的でした。

Nさんは、高校卒業後、外資系IT企業で16年の勤務をへて大学に入学。経営学、マーケティングなど、様々な知識を学ばれたようです。しかし「18歳にまじった34歳」のNさんを、伝統的な日本企業はどのような処遇をしてよいかわからなかった、といいます。伝統的な日本企業は、新卒採用を重視し、「真っ白い人」を組織の色に染める組織社会化のテクニックには長けているものの、Nさんのように、すでに様々な経験をもった人々をいかに処遇し、扱ってよいのか途方にくれる組織が多いのです。

「日本の企業は、あなたみたいな人は怖くて雇えないのが実情です。真っ白な新卒をとって、自社色に染めたい。日本の企業は遅れていると思います」という直截な言葉は、日本企業で聞かれそうなセンテンスのように感じました。

その後、Nさんは紆余曲折をへて、リゾート開発・運営会社に転職を果たし、そこに7年間勤めたのち、現在は地域開発のプロデューサーとして伝統工芸を支える領域でご活躍の模様です。

Nさんのお話のなかで、**個人的に最も興味深かったのは、「大学で学んだことは、仕事現場でかなり使えました」という言葉です。**

Nさんは、大学で学んだ様々な方法論を、仕事の現場で適用したといいます。「研究活動で行うフィールドワークと同じ」という言葉からも、そのことが類推されます。

人文社会科学系の学問分野で大学教員を長く勤めて、いつも思うことのひとつに、**「仕事の現場で必要になるスキル」と「大学で学ぶ研究方法論」の間には、本質的にはあまり差がない**のにな、という感覚があります。

もちろん表面的には、まったく行っていることは違います。しかし、深層を探ってみれば、それは**両者ともに「知的生産の技術」であることには差はありません。**

しかし、一般的には、こうした考え方は支持されません。大学で学ばれることは「座学」であり、現場で用いられるスキルとは明確な差があるとされます。多くの人々

は、教育機関で学ばれることは、あまり役立たないものと思っている人もいます。

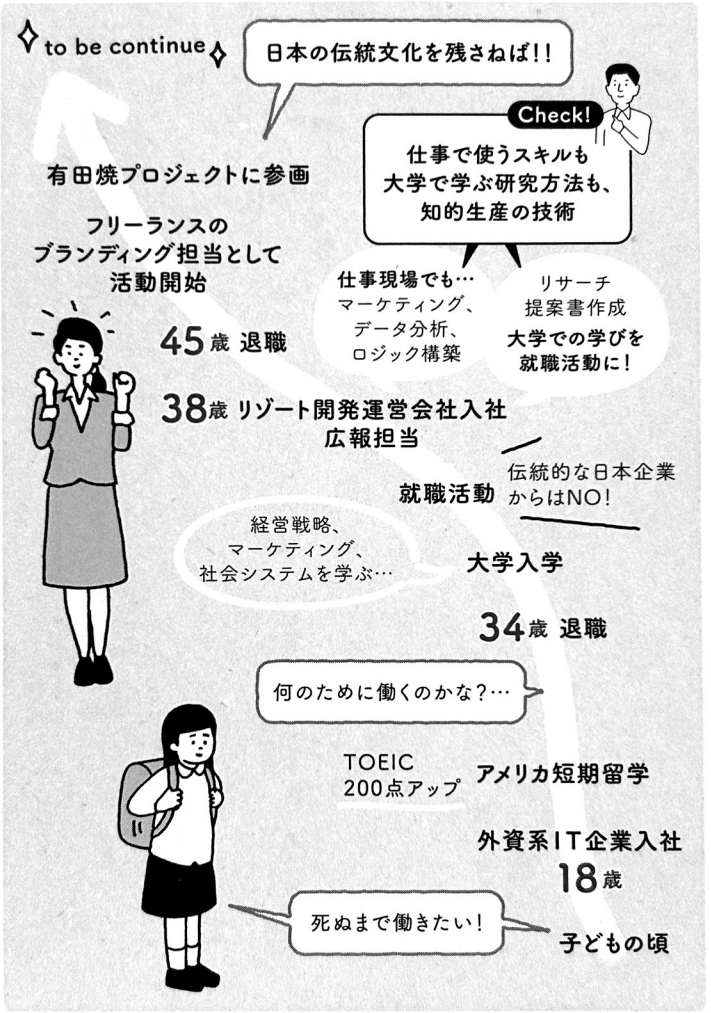
しかし、個人的には、この考え方はまったく事実ではないと思います。インタビューやヒアリングを行ったりするときにはフィールドワークの知識が役立ちますし、Nさんがいうように、上司に納得してもらうための説明や資料づくりではロジカルシンキングが用いられます。数量で人を説得するときには、大学で学ぶ定量的な分析手法が役に立つでしょう。

問題は、**仕事の現場で必要になるスキルと、大学で学ぶ研究方法論の間に「関係がない」という思い込みと、かつ、それをどのように適用してよいかイメージがついていないということ**なのかな、と思います。

大学に限らず公式の授業で学んだことを、いかに仕事の現場で活かすか、そこに貪欲さを発揮すれば、より芯を食った課題解決ができるのではないか、と思います。

この世には、2種類の人種がいるように思います。

教育機関で学んだことを「役立てよう」とする人と「はなから、役立たない」と決めつける人。あなたはどちらの人ですか?


to be continue
日本の伝統文化を残さねば!!
Check!
仕事で使うスキルも
大学で学ぶ研究方法も、
知的生産の技術
有田焼プロジェクトに参画
フリーランスの
ブランディング担当として
活動開始
仕事現場でも…
マーケティング、
データ分析、
ロジック構築
リサーチ
提案書作成
大学での学びを
就職活動に!
45歳 退職
38歳 リゾート開発運営会社入社
広報担当
就職活動
伝統的な日本企業
からはNO!
経営戦略、
マーケティング、
社会システムを学ぶ…
大学入学
34歳 退職
何のために働くのかな?…
TOEIC
200点アップ
アメリカ短期留学
外資系IT企業入社
18歳
死ぬまで働きたい!
子どもの頃